

シリーズ “あいねイラン”

シリーズ立ち上げの背景

“あいねイラン”の「あいね」とは、鏡を意味するペルシア語の単語アーイーネ（或いはアーイエネ）の音写（ひらがな表記）である。ついでに言えば、「あ、いいね」という日本語のもじりでもあることは、既にお気づきのことと思う。このタイトルが示す通り、「あるがままのイランを映し出す」こと、つまり、「等身大のイラン」を、あらゆる視点、様々な次元から日本の読者に紹介することが本シリーズの基本的な狙いである。

とはいえ、「あるがままのイランを映し出す」とはどういうことか、「等身大のイラン」とはどのようなイランを意味するのかについては、様々な考え方があろうし、多様な議論が噴出することも十分に想定される。そうした状況を理解したうえで、少なくとも本シリーズ立ち上げに際して強く意識されたのは、可能な限り第三者のフィルターを通さない、イランに関する「生」の情報を日本の読者に提供したいということであった。

何故、今、このようなことを声高に言うかということ、これまでは、あまりにもそうではなかった、そして今もなお、そうではない、との反省からである。具体的には、日本（日本人）にとって、イランが、物理的に、心象的に、あまりにも遠い存在であった（ある）がゆえに、つまり、直接的関係や交流が希薄であり、加えて、我々が勝手にイランを遠い存在と見做してきたがゆえに、間接的情報つまり第三者の眼を通した、或いは介した情報や知見が幅を利かし、横行してきたという現実にもどかしさを感じざるを得ないからである。

20世紀の半ば以降に特に顕著となったアメリカとの蜜月にイランが終止符を打ち、その上で決別を決定づけた1979年のイスラーム革命からこの方、イランに関する諸々の情報は、多かれ少なかれ、欧米のメディアというフィルターを通して提供される機会が殊更に目立つようになったかに見える。そして、そこに見られるイラン認識の在り方は、19世紀以降に目覚ましい進展を見せた欧米におけるオリエンタリズムが作り出した認識の鋳型を多かれ少なかれ受け継いでいることも否めない。最も分かりやすい例をひとつ挙げておこう。

本邦では、現在の「イラン」（イラン・イスラーム共和国）はかつて「ペルシア」と呼ばれた国のことであると人口に膾炙しているが、これは厳密に言えば間違いである。欧米では、古代ギリシアの時代（例えば、ヘロドトスの『歴史』）からイラン高原を中心とするイラン・ザミーン（イランの地）に興亡を繰り返した諸々の政権（国家）を「ペルシア」と呼びならわしてきた。ところが、この地に誕生した諸政権、或いはこの地に生きた人々が自らの政権（国家）の名前を「ペルシア」と称したことは歴史上、一度もなかったのである。以上の経緯を踏まえて、1935年の春分の日（イラン太陽暦1314年1月1日）をもって、欧米諸国に対して、以後「ペルシア」ではなく「イラン」と称するようにとの声明を、当時の国

王であったレザー・シャーが発したわけである。歴史上の自称は「イラン」であり、しかも「ペルシア」とは、「イラン」の一部（つまり、ファールス=パールス地方）を指しているに過ぎないという理由からであった。要は、レザー・シャー声明の趣旨は、他称である「ペルシア」ではなく、自称「イラン」を用いよ、ということであった。換言すれば、日本の高校世界史教科書のほとんどで、レザー・シャーは国名を「ペルシア」から「イラン」に改めたと書かれているが、厳密にはこれは正しくないということになる。尤も、「イラン」という名辞を国名（国号）として用いたことが史料上確認されるのは18世紀初頭、つまりサファヴィー朝末期以降のことであるという事実をレザー・シャーが認識していたかどうかは定かではない。何れにせよ、以上からも明らかのように、日本では普通に用いられている「アケメネス朝ペルシア」とか「サーサーン朝ペルシア」といった表現がイランで用いられることは決してなく、単に「ハハーマネシュ朝」、「サーサーン朝」と称されるのが普通である。また、ついでに言えば、高校世界史には必ず登場するギリシア都市国家群とアケメネス朝との間の「ペルシア戦争」であるが、イランでは当然の事ながら「ギリシア戦争」として登場してくるのである。また、世界遺産にも登録されているおなじみの「ペルセポリス」（「ペルシア人<ペルセ=パールセ>」の「街、都<ポリス>」を意味するギリシア語が起源）であるが、現地イランでは巷間「タフテ・ジャムシード」（ジャムシードの玉座）と呼ばれており、外国人がいくら「ペルセポリス」と叫んでも、研究者なり、観光業界の関係者なりのごく限られたイラン人を除けばキョトンとした顔をされて、分かってもらえず、ヤキモキすることになる。

さて、“あいね”に戻ると、我が国には、四鏡（『大鏡』、『今鏡』、『水鏡』、『増鏡』）や『吾妻鑑』、『後鏡』などの歴史物語（歴史書）に代表される“鏡もの”の伝統があるが、イランにおいても、鏡（アーイーネ）という言葉は、我が国とは違って、文学における明確なジャンルとして認識されているとまでは言えないまでも（『ペルシア語文学辞典』〔モハンマドレザー・ジャアファリー監修、モイーン出版、1387年初版〕にも、特にそのような立項は見当たらない）、文学的表現としては古くから用いられて来ている。また、現在でも折に触れて、「鏡（アーイーネ）」という言葉が耳目に飛び込んでくる。例えば、去年の事であるが、筆者が東京外国語大学で教えていた頃の同僚（客員教授）であったイラン人のザフラー・ターヘリー先生は現在オーストラリア国立大学でペルシア語を教えておられるが、彼女が中心となって開催されるイランの詩と音楽を巡る国際会議（2020年11月27日開催）の案内が届いた。広く報告者を募ると同時に、参加を促す案内状に記されていたこの会議の統一テーマは「イランの鏡 Mirrors of Iran」であった。

また、参考までに、少し古くなるが、ハーンバーバー・モシャルが編纂した『ペルシア語刊本総目録』（ペルシア語、全五巻、1972年刊）を繙いてみると、書名にアーイーネと銘打った単行本は全部で44点が収録されている。内容はまちまちで、道徳書もあれば、歴史書・詩集・伝記などもある。これらの中で特に目を引くものとしては、イランの歴史を現在に繋がるような学問的方法で考察した最初のイラン人研究者といわれるミールザー・アー

ガー・ケルマーニー（1854～1896年）が死の数年前に著した歴史書（未完）『セキャンダルの鏡(アーイーネ)』（全2巻で、刊行は立憲革命期の1324～26年Q/1906～09年で、立憲主義を唱道した新聞として名高い『スーレ・エスラーフィール』紙の編集人シャーンギール・ハーンの校訂）や、13～14世紀にかけて活躍したインドの詩人アミール・ホスロウ・デフラヴィーが12～13世紀の詩人ネザーミー・ギャンジャヴィーの有名な詩集『ハムセ（五部作）』の向こうを張って編んだ『エスキャンダルの鏡(アーイーネ)』（1326年Q/1908～09年にムンバイ〈当時のボンベイ〉で、石版刷りで刊行）などを挙げることが出来る。

ここで更に話を本来の論点に戻すと、「第三者のフィルターを通さ」ずに、「あるがままの姿が映し出された」イラン、「等身大のイラン」、つまりは「生」のイランとは、そもそもどのようなイランなのか、またそれを提供するという目的は、いかにして達成されるのか、というポレミックな問題については様々な議論が考えられようが、とりあえずは、イラン人自身が、イランをどのようにとらえているか、という点に拘ってみようとするに至った。それも、欧米で生活し活動しているイラン人（1979年の革命後は特にこうしたイラン人が多くなった）ではなく、イラン社会に身を置き、イラン社会との直接的しがらみの中で生きているイラン人が、自分自身の環境であるイラン（社会）をどのように見ているか、という事に着目してみようと考えたのである。端的に言えば、それはイラン人が考えるイランということでもあるが、イランのことはイラン人でなければ語れないとか、イラン人が語るイランがイランの全てだとかと考えているわけでは毛頭ない。ただ、「あるがままの」、「等身大の」、「生の」、「フィルターを通していない」イランに迫る一つの方途にはなるであろうとは考えている。

とはいえ、いざ一歩踏み出そうとすると、立ちどころに壁に突き当たり、なかなか実現のための具体的な手段を見いだせないままに、私のイランとの直接的関わり合いもかれこれ20年を過ぎようとした頃、つまり21世紀を迎える頃になって、漸くにして幸運にも格好の材料を見出すことが出来た。それが、“アズ イラン チェ ミーダーナム？”（自分はイランに就いて何を知っているか）というシリーズの出版であった。

“アズ イラン チェ ミーダーナム？” シリーズとは

2000年にナーセル・タクミールホマーユーン博士が中心となって立ち上げた本シリーズは、“テヘラン研究”シリーズや“テヘラン史集成”シリーズなど、テヘラン関係の出版を得意とする文化研究所(出版社)が打ち出した同社の中心的出版企画である。開始以来既に20年が経っているが、この間に着実に出版点数を増やし、2020年現在で145点（直近の出版は『チャハールシャンベ・スーリー』）に達している。

筆者は2008年1月9日にテヘランのイランシャフル通りにある「文化研究所」にタクミールホマーユーン氏を訪ね、簡単なインタビューを行ったことがあるが、その際に、まず最初に尋ねたのは、“イランの何を知っているか？”シリーズの着想についてであった。彼

の返答は予想通りであり、彼がフランスに留学していた時に、着目するに至った「クセジュ文庫（Que sais-je、私は何を知っているか?）」であった。フランスのクセジュ文庫は古典的教養から最先端のテーマまで、現代に生きる人々が必要とする幅広い知識を提供することに主眼が据えられていると思われるが、タクミールホマーユーン氏が立ち上げたシリーズの特徴は、それに捻りを一つ加えたこと、つまり、対象をイランに限定したことであった。分野は、豊富な内容を誇るペルシア語古典文学から、地理・歴史・社会・経済・文化・芸術・宗教・民俗・工芸など多岐に亘っている。テーマの選定には、氏自らが携わる事もあり、また執筆者自身による持ち込みの場合もあるという。当然のことながら、各テーマの執筆は、それらを専門とする執筆者が担当してはいるが、その最大の特徴は、ほとんどのテーマについて言える事であるが、テーマに何らかのかかわりを持つ者による執筆という基本方針が貫かれてきている事であろう。例えば、『ナハーヴァンド』（イラン西部のハメダーン州の街で、642年にアラブ系ムスリム軍とサーサーン朝軍が闘い、前者が勝利を収めたことで、サーサーン朝の崩壊が決定的となった）の執筆者ホセイーン・ザッリーニーは、シーラーズ大学の歴史学博士号を持つイスラーム期の研究者であるが、生まれはナハーヴァンド、『イランのトルキヤマン人』の筆者ムーサー・ジョルジャーニーは、ゴレスターン州アクゴラー近傍の小村生まれで、トルキヤマン人の歴史・文化・芸術に関する地域研究者、『イランのナーンとナーンヴァーイー（パン焼き屋）』の執筆者モスタファー・ペゼシュキーは研究団体“マシユハド・ナーン集団”を立ち上げた人物、『ジョルファー』（エスファハーンのアルメニア人地区）の筆者アンドラニク・ホヴィアンは、テヘラン生まれではあるが、紛れもないアルメニア系イラン人、といった具合である。創刊から20年がたった現在、点数はまだ145点ほどであるが、徐々に、イラン人が考える「イラン」の外貌がそれなりに浮かび上がってきている。この先、更に点数が増えてゆけば、自ずとよりクリアな「イラン」像が焦点を結ぶことになるだろうことは容易に想像できる。



タクミールホマーユーン博士とそのスタッフ（2008年八尾師撮影）

タクミールホマーユーン博士、アリー・ポルークバーシー博士のこと

ここで、“イランの何を知っているか？”シリーズ立ち上げの立役者ナーセル・タクミールホマーユーン博士の個人史についても少し触れておきたい。彼は、1936年ガズヴィーン生まれの社会学者にして歴史家であり、齢八十才代半ばを超える現在も、イランの「人文学・文化研究所」に所属し、精力的に研究を続けている。彼は1954年から1958年までテヘラン大学で哲学と教育学（学士）、そして社会学（修士）を学んだあと、1972年から1977年まではパリ大学の博士課程に留学し、社会学で博士号を取得している。

テヘラン大学を卒業してからパリ大学に留学するまで10年と少しの隔たりがあるのは、この間に彼は政治活動に専念していたためであろうと推測される。困みに、1960年には国民戦線青年部のメンバーとなっている。ほぼ同時期と思われるが、イラン国民党の党员として政治活動に足を踏み入れ、同党党首のダリウーシュ・フォルーハルの盟友と目された。イスラーム革命(1979年)後は、第一期イスラーム議会議員選挙に、故郷のガズヴィーンよりイラン国民党の候補として立候補するも落選を経験した。

1981年6月、イスラーム議会の弾劾決議を受けて免職となった直後のイスラーム共和国初代大統領バニーサドルをタクミールホマーユーン氏が自宅に匿ったとして逮捕・拘禁される。彼自身の釈明としては、バニーサドルを匿う手助けはしたが、彼が自分の家に居たことはないとして否定した。しかし、バニーサドルが国外に逃亡すると、革命裁判所から一旦は死刑の判決が下される。その後終身刑に減刑された。ところが二年後には恩赦の対象となり、10年の懲役刑に減刑となり、更にその二年後には懲役残余期間を免除され、1985

年には釈放されるに至った。

その後のタクミールホマーユーン氏は専ら学術・研究活動に携わり、現在までにイラン史やテヘラン史関係を中心として多数の著書を世に問うている。勿論、“イランの何を知っているか？”シリーズでも自ら筆を執って、本シリーズの第一作目となる『イランザミーン—文化的・歴史的境域—』(no.12000 年刊)を初めとして、『アーバスクーン—アシュルアダ島—』(no.4, 2000 年刊)、『マーザンダラーンの海』(no.6, 2000 年刊)、『ペルシア湾』(no.10, 2001 年刊)、『現代イランの国境』(no.13, 2001 年刊)、『サーマーン朝—イラン・イスラームの文化的開花期—』(no.15, 2001 年刊)、『イラン小史』(no.25, 2002 年)、『ナーデルシャー・アフシャール』(no.27, 2002 年刊)、『テヘラン』(no.45, 2003 年刊)、『ハーラズム』(no.50, 2004 年刊)、『ジュンディーシャー—プール大学』(no.60, 2005 年刊)『イランにおける教育』(no.70, 2006 年刊)、『ソルターニーエ』(no.80, 2008 年)、『絹の道』(no.90, 2010 年刊)、『イランにおけるマクタブハーネ』(no.140, 2018 年刊)など全部で 15 点もの執筆を精力的に続けてきている(2020 年現在)。ここで、“あいねイラン”シリーズの既刊二冊(『ガーリーシューヤーン』と『ナフル巡行』)の原著者であるアリー・ボルークバーシー博士に就いても一言付け加えておきたい。

アリー・ボルークバーシー博士は、1935年のテヘラン生まれで、テヘランで初等・中等教育を終えたのち、テヘラン大学に入学。1962年に文学士、続いて、同大学の文学・人文学部より、一般言語学・古代言語の修士号を取得した。同大学在籍中にイラン国内の様々な民族集団(aqvām)に関心を寄せるようになった。1970年には渡英し、オクスフォード大学の博士課程在籍中は社会人類学的研究に専念。帰国後は講義、執筆、研究活動に携わり、“イスラーム大百科出版事業団科学高等評議会”のメンバー、第一期“イラン人類学協会”の理事会メンバーなどを歴任、年齢80歳半ばを超えた現在もイラン・アカデミーの人類学グループ学術委員会のメンバーを務めるなど、イランの社会人類学分野において多大な功績を残し、イランでは“科学的人類学の父”と呼ばれている。

現在までに20点の著書と200篇を超える論文を物しているが、“イランの何を知っているか？”シリーズの中でも、『ガーリーシューヤーン』(no.5)、『ゲシュム島』(no.2)、『ノウルーズ』(no.7)、『ナフルギアルダーニー』(no.18)、『イラの部族社会』(no.31)、『イランの伝統遊戯』(no.73)、『イランのガフヴェハーネとそこに集う人々』(no.116)、『シヤベ・ヤルダー』(no.124)など、自らの専門分野を活かした興味深い諸著作を次々と発表しており、いわば本シリーズの常連執筆者となっている。

ペルシア語勉強会について

“あいねイラン”シリーズが日の目を見ることとなるにあたって、その主たる原動力となっただけでなく、大きな支えともなった「ペルシア語勉強会」についても簡単に紹介しておきたい。

そもそもの事の起こりは、今から30年ほど前に遡る。正確には1994年も終わりに近

づいた 11 月末、東外大の卒業生やら市井でペルシア語を勉強している方など数名が大学の筆者の研究室を訪ねてこられ、ペルシア語の勉強を続け、スキルアップを図れる場を設けて貰いたいとの要望を伝えてきた。私もこれに賛同し、ペルシア語勉強会の第一回目が開催されたのは、同年の 12 月 9 日であった。それ以来、私が在外研究に出かけていた 2000 年 10 月から 2001 年 9 月までと、定年退職後、3 年弱イランのイスラーム自由大学で教鞭を執っていた 2016 年から 2018 年の秋までを除き、年に 20 回平均のペースでこれまで続けてきた勉強会は、2021 年の 12 月 4 日開催をもって 335 回目を迎えた。

この間、勉強会には多くの方々が参加され、教室とはひと味違う忌憚のない意見を皆さんが述べられていたことは記憶に新しい。勉強会の中心メンバーは東京外国語大学、東京大学、慶応大学、聖心女子大学、武蔵野美術大学などの卒業生や現役の学生であったが、時には、イランからの留学生なども顔を出してくれて、我々に貴重な助言を与えてくれた。勉強会自体は、ペルシア語の文献を読み解く作業を中心に進められ、テキストも分野を限定せず、できるだけ幅広いテーマを念頭に置いて選定を行った。因みに、最初に取り上げたのは、ジャアファル・シャフリー著『テヘラン社会史』全 6 巻の内の一冊、次いでマフムード・エエテマードッザーデ（ベフ・アーズィーン）著『イランの絨緞』、そしてアシュラフ・デフガーニー著『抵抗の詩』などであり、他にも、エスファハーンの地誌やイラン人の日本滞在記などもあった。これらは、とにかく、「ペルシア語勉強会」という集まりの名称そのままに、色々な分野の様々な種類のペルシア語に接するという基本的目標に沿って、しかも参加者の意向を汲みながら取り上げられた結果であった。

筆者は 2015 年の 3 月末日をもって、東京外国語大学の定年を迎えたが、これを機に、勉強会のスタイルにも少し変化を与えようと思い始め、漫然と読み飛ばすだけではなく、その結果（成果）を何らかの具体的な形にしたいと考えるに至った。しかし、その後、私自身がイランで教鞭を執ることになったため、勉強会も私が日本に一時帰国をしている間だけとなり、途切れ途切れの開催を強いられた。それでも、私が日本に戻った 2018 年の秋頃からは、再びコンスタントな開催が可能となった。幸運にも、包 (PAO) より勉強会の成果を出版対象として考えたい旨の連絡を受けたのは、ほぼその頃の事であったと記憶している（2019 年 3 月 9 日には出版に向けての第一回目の具体的な話し合いが行われた）。

元々、勉強会自体は 2~3 週間に一度くらいのペースであり、しかも一回に複数のテキストを同時並行的に読み進めるといった離れ業をやりながら、ノルマを熟すというような焦りは毛頭なく、のんびり和気あいあいとした雰囲気の中で、むしろ場を楽しむといった趣が強かったかに記憶している。

そういう意味でも、自分たちの勉強の成果が晴れて世に問われるということには、勉強会のメンバーひとりひとりにとって感慨もひとしおであることはいうまでもない。

学校の授業とは違い、参加者はみなそれぞれの自由意思で集い来っていることもあり、勉強会の雰囲気は常に開放的かつ積極的な雰囲気が漲っていた。中心となる翻訳者が用意した下訳について、一言一句疎かにせず、疑問に感じた訳文、違和感を持った日本語表現など

について参加者ひとりひとりが言いたいことを言うという雰囲気は終始貫かれたと思う。

“あいねイラン”シリーズの一点一点はそうやって出来上がっているのである。

最後に、「ありのままのイラン」、「生のイラン」を伝えるという本シリーズの基本的狙いを念頭に置きながら翻訳作業を進めるに当たって、最も気を使い、しかも試行錯誤を繰り返した点にも触れておきたい。それは、固有名詞などの日本語カナ表記である。

日本語としても市民権を獲得し、ほぼ完全に定着していると思われる固有名詞（例えば、「イラン」：ペルシア語ではイーラーン、「テヘラン」：ペルシア語ではテフラーン、「イスラーム」：ペルシア語ではエスラーム、「クルアーン」：ペルシア語ではゴルアーン）などの幾つかの例外を除いて、出来る限り、現代ペルシア語の発音に近づける形でのカナ表記を心掛けた。例えば、ギリシア語に由来するアケメネス朝ではなくハハーマネシュ朝、欧米風の訛った発音表記であるパーレピ朝ではなくパフラヴィー朝、イスファハンではなくエスファハーンといった具合である。やはり、「ありのままのイラン」、「生のイラン」を伝える事をモットーとする以上は、彼ら自身の表現に可能な限り近づけるのが筋でもあり、礼儀でもあろうと考えるからである。とはいえ、基本的に日本語を母語とする“あいねイラン”シリーズの読者の立場に立てば、過度に見慣れないカナ表記固有名詞が並んでいるのも、煩わしい限りであり、場合によっては読書意欲を削いでしまう結果にも繋がりがかねない。要は程度問題かもしれないが、我々としても、この点に関しては今後もより適切な形の追及を心掛けてゆきたいと考えている。

ペルシア語勉強会代表

八尾師 誠